

〔4〕 付録 (文法事項解説)

「生活日本語Ⅱ」は第1課と第2課が「生活日本語」の文法事項の復習のための学習項目を取り上げている。第1課には動詞の活用と種類等について、第2課には形容詞の活用と種類等について、それぞれ説明、練習がある。

レベルⅡ以上の学習者が、これまでの日本語の使用の上に立って、活用の面で動詞、形容詞を整理して形を定着させておくことは、今後、更にこれらの語彙が増えていったときにそれぞれの語の意義・用法を把握し、正しく使用していく応用力をつけるのに役立つと思われる。

次に、これらの指導のために教授者が知っておくべきことについて、動詞と形容詞の活用を中心に若干の解説を設けた。もちろん、ここで触れたのは、日本語教育に必要な動詞、形容詞についての知識のほんの一部であることは言うまでもない。また、これらは教授者に対するもので、これをそのまま学習者に示すべきものではない。

● 日本語学習における動詞

日本語の初級段階には、文法項目の学習で学習者を苦しめる「三つの関門」があると言われる。

- すなわち、① 動詞のテ形 (～て(いる)、～て(ある)、～て(おく)、……)
② 受給表現 (やる／もらう／くれる、及びこれらを補助動詞※として用いた～てやる／～てもらう／～てくれる)
③ 待遇表現 (いわゆる「敬語」等の表現)

の三つである。

※補助動詞：もともと動詞であるものを他の動詞の後に付けて助動詞のように用いるもの。「壊れている」「壊してみる」「壊してやる」の「いる」「みる」「やる」のようなものを言う。

この三つのいずれもが、動詞 (又は補助動詞) の「意義・用法」、「活用」の問題や動詞と助詞・助動詞の関係と関連している。動詞が中心となって作られる文は、意義の面でも、構造の面でも複雑だと言うことになる。

このように、日本語の学習において動詞は厄介だと言われるが、逆に、学習者が動詞を中心とした文をいかに多くマスターするかが、日本語力を高める鍵だとも言える。

このような、動詞に関連した種々の学習項目を学習者に混乱を起こさせないように、

適切な方法で、導入・練習・定着させていくためには、教授者側が把握しておかなければならないことも多い。

動詞の分類※も、そのうちの一つで、意義と形（相互に関連している場合も多い）の上から様々な分類がある。ここでは、動詞を活用の型によって分類したものについて考えていく。

※例 自動詞 \longleftrightarrow 他動詞、意志動詞 \longleftrightarrow 無意志動詞、活用の型による分類

(1) 「生活日本語」の動詞の活用の扱いと指導上の留意点

あいさつ表現や動詞のマス形による簡単なやり取りを学習した後、動詞の辞書形、テ形と進んでくると、学習者から「日本語は難しい」と、動詞の活用を覚えなければならないことに対する戸惑いが訴えられる。この段階では、教授者側の指導の工夫と、学習者側の踏ん張りが最も必要となる。

帰国者に日本語を教えるに当たっては、文法的説明を先にしておいて、会話場を教えるというのは適当ではないだろう。動詞の活用の指導でも、動詞の活用表を暗記してから、その動詞を用いた会話場面の練習に入るなどということは避けたい。まず、会話場面で、適切に語（動詞）が使えなければならない。幾つかの場面で、幾つかの動詞を用いてその用法をある程度マスターした後、用いた活用形の範囲を幾らか広げるといった程度で練習をすべきであろう。

『生活日本語』における動詞の活用形の扱いは、第8課まででは、マス形（「～たい」の形を含む）・「～てください」（「～てくださいませんか」の形を含む）・辞書形のそれぞれを用法の練習を中心に個別に学習するようになっている。

また、第3課・第4課でテ形、第8課で辞書形について簡単な形の練習を導入している。その他の動詞の活用形を含んだもの（例 「どうすればいいんですか」「お願いします」）は、1文（1句）の単位で扱っている。

形の練習でも、まず、一つ一つの動詞について、その会話場面で用いられる形での定着の練習をし、第8課で初めて動詞には活用というものがあり、活用の型から動詞を三つの類型に分けることができることを提示している。

その後、第11課でナイ形の形の練習を導入し、第12課で、第8課の三つの類型を動詞の八つの活用形と結び付けて再提示している。（『生活日本語指導参考資料』第8課・第11課参照）

以上は『生活日本語』の扱いだが、実際の指導は、学習者の実状に合わせて、項目の提出時期や順序、またその方法の工夫等を考慮すべきことは言うまでもない。

「方法の工夫」で最も大切なことは、形の練習で学習者に戸惑いが見られるときは、直ぐにそれぞれの表現形が用いられる場面の例を示すなどしてその表現のコミュニケーション上の機能を学習者に確認させることだろう。形の練習といっても学習者が、何の練習をしているのかを理解せずに行ったのでは、「応用力をつける」どころか、「形の定着」も難しい。逆に、何をしているのかさえ、学習者にしっかりと理解させていけば、この種の練習は宿題や自習に委ねられる部分も多い。

(2) 動詞の活用

動詞を活用の型によって分類する仕方は、学校教育の「国語」で教える文法（以下「学校文法」と言う）と、日本語教育では、かなり違いがある。学習者の中にはこれまで、学校文法の方法で活用を学んできた者もいると考えられるので、教科書と学校文法の方法を対比させて見ていきたい。

学校文法では、動詞を活用によって次の五つに分類する。

- | | | |
|-------------|-----------|----------|
| ①五段(四段)活用動詞 | ②上一段活用動詞 | ③下一段活用動詞 |
| ④カ行変格活用動詞 | ⑤サ行変格活用動詞 | |

これに対して、帰国者等の日本語教育では、学習の簡便のために学校文法の②と③、④と⑤をそれぞれ一まとめにして次の三つとする。ただし、三つの名称はここで示したものの以外の場合もある。

- | | | |
|-------|-------|-------|
| ①五段動詞 | ②一段動詞 | ③例外動詞 |
|-------|-------|-------|

また、それぞれの動詞の活用形も学校文法では次のように六つ又は七つ（「未然形」とは別に「志向形（推量形）」を立てる場合）となる。

- | | | | | | |
|-----------|------|------|------|------|------|
| ①未然形(志向形) | ②連用形 | ③終止形 | ④連体形 | ⑤仮定形 | ⑥命令形 |
|-----------|------|------|------|------|------|

しかし、これは、日本語教育に、必ずしもなじむと言えないので、それぞれの教材によって工夫されている。教科書では、中国からの帰国者が学習するのに比較的妥当と思われる次の七つの活用形を採っている。

- | | | | | | | |
|------|------|-----|------|-----|--------|------|
| ①ナイ形 | ②マス形 | ③テ形 | ④辞書形 | ⑤バ形 | ⑥ウ/ヨウ形 | ⑦命令形 |
|------|------|-----|------|-----|--------|------|

また、これらの活用形についても、学校文法では、語幹と活用語尾とに分けて考える。つまり、ある動詞のすべての活用形を仮名で書いたとき、各活用形を通じて変わらない部分を「語幹」と言い、変わる部分を「活用語尾」と言う。

例えば、「読む」という動詞の活用を表に表してみると次のようになる。

語	語幹	活 用 語 尾						
		未然形 (志向形)	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形	
読む	よ	ま	も	み・ん	む	む	め	め

語幹の「よ」に各活用形のそれぞれを付けた「よま」「よも」「よみ」「よん」「よむ」「よむ」「よめ」「よめ」が動詞「読む」の未然形、(志向形)、連用形、終止形、仮定形、命令形ということになる。

これに対し、「生活日本語Ⅱ」が採っている活用形によると次のようになる。

語	ナイ形	マス形	テ形	辞書形	バ形	ウ/ヨウ形	命令形
読む	よまない	よみ	よんで	よむ	よめば	よもう	よめ

これを学校文法の活用形と比べてみると、「語幹」「活用語尾」という区別を設けず、①ナイ形（学校文法の未然形に助動詞の「ない」が接続したもの）、②マス形（学校文法の連用形のうち助動詞の「ます」に接続するもの）、③テ形（学校文法の連用形のうち助動詞の「て」が接続したもの）、④辞書形（学校文法の終止形と連体形を合わせたもの）、⑤バ形（学校文法の仮定形に助詞の「ば」が接続したもの）、⑥ウ/ヨウ形（学校文法で未然形、志向形を立てる場合は志向形に五段動詞なら助動詞の「う」、一段動詞・例外動詞なら「よう」が接続したもの）、⑦命令形（学校文法と同じ）となる。

教科書の方法で注意したいのは、マス形の場合のみ「動詞+ます」の「ます」を取った形（動詞「読む」では「よみ」）を活用形としているが、それ以外の活用形の場合は（学校文法で言う）活用語尾や「て」「ない」等の助詞、助動詞も含めて活用形と言っているので、扱いに違いがあることである。

これは、動詞によってはマス形が名詞として用いられたり、「～ます」の「ます」の部分だけが変わって「～ません」「～ました」「～ましょう」のように用いられるからである。（教科書P19参照）

学校文法等で活用を覚えてきた学習者にも、教科書の方法はそれほど無理なく理解されると思われる。逆に、レベルⅡの学習者などに対して、この方法は学校文法のそれよりは効率的と言えよう。

● 動詞の活用の指導

れんがを組み上げれば家になるが、材料だけがばらばらにあっても、家にはならない。もちろん、家を造る材料を見て、これぐらいの大きさのこんな形の家になるかもしれな

いと、想像することはできるかも知れないが、実際に出来る家との違いが大きいことの方が多だろう。

日本語でも、中国語でもただ単語を寄せ集めても完全な意義を相手に伝え得る文にならないことは言うまでもない。

日本語は、「膠着語(こうちゃくご)」と言われ、意味の固まりである単語を助詞や助動詞と言う「膠(にかわ)」でくっつけて、全体として意義のある文を組み立てていく。このとき、動詞等活用のある語は後に付く助詞、助動詞の種類によって、どの活用形にするかが決まっている。

一方、中国語は、「孤立語」と言われ、単語と単語を順序よく組み込み、つないでいくことによって文を作る。文としての意義は語順によって生まれる。中国語にも日本語の助詞、助動詞に似たものもあるが、動詞等の活用はない。

この点では、学習者の母語の中国語と、日本語とは全く違った言葉と言える。学習者が、「日本語は難しい」と訴える場合、これら文の作り方の違いに対する戸惑いを示していることも多いと思われる。助詞、助動詞に動詞等の活用といった学習者にとって、なじみの薄い(ない)概念を伴った動詞文の指導は慎重に行わなければならない。

(1) 動詞文指導例

場面に即した形で動詞文を導入した後、応用力を付けるため形の練習をする。

例 動詞：借りる／貸す

① 動詞を中心とした文の意義と、その文における助詞の役割を確認する。

- | | |
|---|--|
| { | (林さん) が (森さん) に (テープレコーダ) を <u>借りた</u> 。 |
| | 正道くんが 先生に 日中辞典を <u>借りた</u> 。 |
| | 田中さんが 李さんに 教科書を <u>借りた</u> 。 |
| { | (森さん) が (林さん) に (テープレコーダ) を <u>貸した</u> 。 |
| | 先生が 正道くん に 日中辞典を <u>貸した</u> 。 |
| | 李さんが 田中さんに 教科書を <u>貸した</u> 。 |

*レベルの上の学習者には、これらの文が意義を変えずに、動詞以外の語順を替えることもできることを知らせてもよい。これにも、助詞、助動詞とそれが接続している語の結び付きの強さは注意させたい。

(林さん) が (森さん) に (テープレコーダ) を 借りた。

(森さん)に(林さん)が(テープレコーダ)を借りた。

② 動詞の各活用形を確認する。

語	ナイ形	マス形	テ形	辞書形	バ形	ウ/ヨウ形	命令形
借りる	かりない	かり	かりて	かりる	かりれば	かりよう	かりろ
貸す	かさない	かし	かして	かす	かせば	かそう	かせ

借りなかった／借りました／借りてる／借りたり／……

貸さなかった／貸しました／貸してる／貸したり／……

③ ①、②を組み合わせて意義のある文を作る。

林さんは、森さんにテープレコーダを借りている。

森さんは、林さんにテープレコーダを貸さなかった。

……………

④ ③を場面に戻して、場面での用法を確認する。

先生： 林さん、いいテープレコーダですね。

林： ああ、これ(は、)を、森さんに借りて(い)るんです。

……………

(2) 動詞の活用の指導で、学習段階別に留意すべき点

ア 日本語を学習し始めた段階(入門時期)では、仮名の「五十音図」を飲み込ませる指導を徹底したい。

日本語の動詞の活用は「五十音図」と深い関係がある。「五段動詞」「一段動詞」といった命名や学校文法の「活用語尾」という考え方などもこれを反映している。つまり、各々の動詞の活用の型は、「五十音図」の各行(ア行・カ行・サ行・……)と各段(列)(ア段・イ段・ウ段・……)に関連している。このことは、活用表によく表れている。

{例1} 一段動詞「起きる」「見る」の活用表

語	ナイ形	マス形	テ形	辞書形	バ形	ウ/ヨウ形	命令形
起きる	おきない	おき	おきて	おきる	おきれば	おきよう	おきろ
見る	みない	み	みて	みる	みれば	みよう	みろ

起きる き： カ行・イ段 → カ行一段動詞

見る み： マ行・イ段 → マ行一段動詞

*学校文法では、このような「イ段」の一段動詞を「上一段動詞」と言う。

〔例2〕 一段動詞「寝る」「取れる」の活用表

語	ナイ形	マス形	テ形	辞書形	バ形	ウ/ヨウ形	命令形
寝る	ねない	ね	ねて	ねる	ねれば	ねよう	ねろ
取れる	とれない	とれ	とれて	とれる	とれれば	とれよう	とれろ

寝る ね： ナ行・エ段 → ナ行一段動詞

取れる れ： ラ行・エ段 → ラ行一段動詞

*学校文法では、このような「エ段」の一段動詞を「下一段動詞」と言う。

〔例3〕 五段動詞「書く」「取る」の活用表

語	ナイ形	マス形	テ形	辞書形	バ形	ウ/ヨウ形	命令形
書く	かかない	かき	かいて	かく	かけば	かこう	かけ
取る	とらない	とり	とって	とる	とれば	とろう	とれ
(カ行)	か	き		く	け	こ	け
(ラ行)	ら	り		る	れ	ろ	れ
			い				
			え				
	ア段	イ段	(行外)	ウ段	エ段	オ段	エ段

〔例4〕 例外動詞「来る」「する」の活用表

語	ナイ形	マス形	テ形	辞書形	バ形	ウ/ヨウ形	命令形
来る	こない	き	きて	くる	くれば	こよう	こい
する	しない	し	して	する	すれば	しよう	しろ

来る きくこ：カ行・イ段・ウ段・オ段 → カ行例外動詞

する しす：サ行・イ段・ウ段 → サ行例外動詞

*学校文法では、「来る」を「カ行変格活用動詞」と言い、「する」及び「～する」の形の動詞を「サ行変格活用動詞」と言う。

以上のように、動詞の活用は「五十音図」が頭に入っていると理解しやすい。「五十音図」の指導は、行（あいうえお、かきくけこ、……）だけでなく、段（あかさたな…、いきしちに……、……）についても入門段階で徹底的に行いたい。これらの練習は、

仮名の学習を一応終えた後でも、折に触れ、繰り返し行うようにしたい。また、日中辞典や国語辞典を引く訓練をし、これらの辞書を活用する習慣をつけるのも大切である。教室や家の勉強をする部屋などでは、目につく所に「五十音図」を張るなどしておきたい。

イ 次の段階は、基本的な動詞の数を増やす段階になる。まだ、この段階では個々の動詞の活用体系を示すのは避け、出てきた活用形をその都度、一つ一つ覚えるよう指導すればよい。

ただし、学習が進み動詞のいろいろな活用形が出てくるにつれて、個々の動詞ごとに各活用形が対照できる表のようなものを作らせて、体系らしきものがあることを感じさせておくのもよいだろう。

例	～ます ～ました ～ません	～たい	～てください い（ませんか）	～た	～。 ～もの	～ない ～なくても
	書きます 書きました 書きません	書きたい	書いてください さい（ませんか）	書いた	書く。 書くもの	書かない 書かなくても も
	読みます			読んだ	読む。	読まない

教授者は、既習の基礎的な動詞についてこのような表を作るとともにどの会話場面で出てきたのかをメモしておき、活用の指導のときに、必要なら既習の文脈も提示できるようにしたい。

ウ そして、動詞の活用体系を教えていく訳だが、ここで初めてこれまで暗示的に示してきたものを「活用体形」としてまとめる。「～形」という言い方と、動詞の活用形による分類を導入していくことになる。これまでの段階でのトレーニングが十分にしていれば学習者の拒否反応は少ないだろう。

順序としては、「活用形」の概念（ナイ形、マス形、……）を先に示し、次に、その活用の型の類型によって、動詞の三分類を示すと理解しやすいようだ。

(3) 動詞の活用形の問題点

ア 活用体系を導入してしばらくすると、学習者から、個々の動詞が、五段動詞か一段動詞かを簡単に見分ける方法はないかという質問が出る。

日本の小中学生になら、「動詞に打ち消しの助動詞の「ない」を付けたとき、活用

語尾が、ア段なら五段活用動詞、イ段なら上一段動詞、エ段なら下一段動詞だ」と言えよ。よいが、日本語を外国語として学んでいる者には通用しない。つまり、その動詞がナイ形が出ていればこの方法で分かるが、それ以外の場合は、勘を頼りに辞書形にしてみても辞書で当たってみるしかない。

結論から言うと、個々の動詞のいろいろな活用形を会話文の中で一つ一つ覚え、類推力をつけることしかないと言えよう。教授者は、その類推力をつけるための指導をすることになる。そのために、動詞文の中で助詞、助動詞の用法を覚えた後、これらの助詞、助動詞を他の動詞と結びつけた形で覚えることも必要だろう。そして、なるべく早く活用形などということを考えなくても、文の中で自然に正しい形が使えるようにさせたい。

次に、各活用形からその動詞が五段動詞か一段動詞かを推定する方法の一つを示すが、これは、教授者が承知していて指導の際、幾つかの例文を対比させて提示するとき等の参考である。学習者にこのまま示しても煩雑で、混乱を招くだけなので注意したい。

① 辞書形から見て

辞書形が「～る」以外ならば五段動詞。「～る」ならば一段動詞かラ行の五段動詞である。これらをマス形にして判断すると次のようになる。

五段動詞ならば、語末の「る」を「り」に替えてマス形にする。

一段動詞ならば、語末の「る」を取るだけでよい。

ただ、マス形の最後の仮名だけを見ると、ラ行五段動詞とラ行一段動詞は同じ、「り」となり混同しやすいので注意がいる。

入る (ラ行五段動詞) はいる。 はいり (ます)

借りる (ラ行一段動詞) かりる。 かり (ます)

② マス形から見て

マス形の最後の仮名が、エ段ならば一段動詞。イ段ならば五段動詞、一段動詞いずれも考えられる。辞書形などと比較してみないと区別できない。

③ テ形から見て

「て」の前の仮名が「し」「っ」「ん」ならば五段動詞。「い」ならば五段動詞、一段動詞いずれの場合もある。「し」「っ」「ん」「い」以外ならば一段動詞である。「い」である一段動詞で、一般的なものは「居(て)」「用(て)」「^ひ率(て)」「^ひ射(て)」ぐらいのものなので、そのほかは五段動詞と思ってよい。

④ バ形から見て

「ば」の前の仮名が「れ」以外なら五段動詞だが、マス形にするとき、「れ」が取れるものは一段動詞で、「れ」を「り」に替えるのが五段動詞である。

⑤ ウ／ヨウ形から見て

「～よう」ならば一段動詞、「よ」が付かない「～う」ならば五段動詞である。

⑥ 命令形から見て

語末の仮名が「ろ」（書き言葉でまれに「よ」のこともある）ならば一段動詞で、それ以外なら五段動詞である。

イ 次に学習者の多くが難しい活用形として挙げる五段動詞のテ形について一言触れておく。

動詞のテ形は、「～て」の形（例 書いてください／書いている／書いちゃった／……）以外、過去・完了の「～た」、条件等を表す「～たら」、列挙等の「～たり～たり」の形と通じる。

これらの「て」「た」「たら」「たり」の直前の仮名（音）が、(2)のアの各動詞の活用表の例（P202, 203）を見ても分かるように五段動詞のテ形のみ他の活用形がよっている行と違っている。五段動詞のテ形はサ行の五段動詞（例 貸して／話して／増やして）以外は、「い」「っ」「ん」のいわゆる音便形（例 書いて／買って／読んで）となる。

しかし、これらはそれぞれの五段動詞の活用形がよっている行によってどの音便形を採るか決まっている。学習者にも適切な時期にこの決まりを指導していく訳だが、「決まり」を一覧表にしたものが教科書のP43にある。教授者は、この表以外の五段動詞で既習のものや基本的なものについて、用例も含めて提示できるように準備しておくことが必要だ。

ただし、五段動詞の「行く」だけは、この表に当てはまらない唯一の例外なので注意したい。「行く」はカ行の五段動詞なので、音便形は「書く」等と同じく「い」であるべきだが、実際はタ行、ラ行、ワ行と同じく「っ」で「行って」となる。

ウ 最後に、可能を表す形についてだが、一段動詞ではナイ形の「ない」を取って、「られる」を付ける（「れる」を付ける人もいる）が、五段動詞では対応する別の形（一段動詞）を用いるのが一般的だ。五段動詞のナイ形から「ない」を取って、「れる」を付けても可能を表すとした文法書等もあるが、これらは現在、標準語であまり用いられない。

しかし、これも「行く」は例外で、一段動詞の「行ける」も、「れる」を付けた「行かれる」も一般的である。

〔一段動詞〕 起きる → 起きられる / 寝る → 寝られる

〔五段動詞〕 書く → 書ける / 休む → 休める

→? 書かれる / →? 休まれる

行く → 行ける

→ 行かれる

ただし、地域によっては「書かれる」「休まれる」等「れる」を付けて可能を表すところもあり、そのような地域では、こちらを重点として指導することになるが、対応した一段動詞形も聞き取れるようにしたい。

● 形容詞の取扱いについて

「生活日本語」「生活日本語Ⅱ」では、学校文法における「形容詞」と「形容動詞」をまとめて大きく「形容詞」と一括して扱っている。どちらも、ものの様子や状態を表す用言となる言葉だからである。その「形容詞」を、活用の型によって、二つのタイプに分類し、それぞれ「イ形容詞」「ナ形容詞」と呼んでいる。

ものの様子や状態を表す言葉は、「大きい」「白い」、「静かな」「りっぱな」等の「イ形容詞」「ナ形容詞」だけではない。ほかにも「すべての」「本当の」、また「大きな」「あらゆる」等の多くの言葉がこれに当てはまる。これらもすべて形容詞に含める考え方もあるが、ここでは、活用の型に焦点をあて、「イ形容詞」「ナ形容詞」の二つのタイプに当てはまらないものについては触れないこととする。

*「大きな」は学校文法では「連体詞」として扱う。名詞が続く形が「～な」なので「形容動詞」と見られることがあるが、他の活用形（大きだろう／大きだった等）はないので「連体詞」とする。その点で、「暖かい」と「暖かな」等形容詞と形容動詞のそれぞれがあるものとは違いがある。

● 活用表について

日本語教育における「イ形容詞」「ナ形容詞」は、学校文法における「形容詞」「形容動詞」にそれぞれ対応している。ここに、参考のため、学校文法で主に用いられている活用表を挙げておく。

	語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
形容詞	白い	しろ	かる	かつ く	い	い	けれ	○
形容 動詞	静かだ	しずか	だろ	だつ で に	だ	な	なら	○
主な用法			ウに 続く	タ・ナルに 続く	言い切 る	トキに 続く	バに 続く	

学校文法で用いられている表を、「形容詞」を「イ形容詞」に、「形容動詞」を「ナ形容詞」に替えることで、そのまま日本語教育に用いることができるかという点、そういうわけにもいかない。学校文法の表は、いわば、既に使っている言葉を分析するための表であるのに対し、日本語教育のそれは、その表を使って、日本語が使えるようになるためのものだからである。日本語教育で用いる活用表は、とり組みやすく、使いやすく構成されていなければならない。第2課「形容詞の復習」(教科書P89~90)にまとめられている表は、そうした配慮のもとに工夫されたものである。

学校文法では、語幹と活用部分が切り離されているが、教科書では、語全体が提示されていること、表の枠組みも、「未然形」「連用形」…といった分類ではなく、現在・過去・肯定・否定と、一番基本的な言い切りの使い方による区分けになっていること、また網羅的にすべてを一つの表にすることを避け、前述の基本の四つの形を中心に簡単な構成にし、その他の重要な使い方である名詞の前にくる形や動詞の前にくる形、連結の形は、表の枠外に、注のような形で付してあることなど、すべて、学習者が取り組みやすく、この表によった口ならし練習をすることで、すぐに、会話場面で使えるようにしたものである。

● 形容詞の活用の指導

(1) 現在・過去・肯定・否定の形

形容詞の導入の段階で、初めに問題となるのは、この四つの基本的な言い切りの形(丁寧体)の習得である。動詞の場合には

たべます。 たべません。
たべました。 たべませんでした。

と規則的な変化をするので、比較的理解しやすいが、形容詞の場合には、

〔イ形容詞〕		〔ナ形容詞〕	
白いです。	白くないです。 白くありません。	静かです。	(静かではないです) 静かではありません。
白かったです。	白くありませんでした。 白くありませんでした。	静かでした。	(静かではなかったです) 静かではありませんでした。

となっており、動詞と対応しないこと、また、形容詞の中でもイ形容詞とナ形容詞の二つが対応していないことが、滑らかな使用を防げる原因となっている。したがって、この基本的な活用の習得については、初期の段階での徹底したトレーニングが必要となる。

*レベル1の学習者に対しては、一時にイ形容詞・ナ形容詞、それぞれの四つの形の導入は難しいと思われる。イ形容詞であれば、イ形容詞に限り、初めは現在の形とその否定形だけという具合に少しずつ時間をおいて定着を図ることが大切である。

また、否定の形についても、一種類に統一した方がよいだろう。十分定着した時点で広げられるようであれば広げてよいだろう。二つの言い方を使いこなすことが難しいようであれば、一方のみでかまわないが、十分になじんだ時点で二つの言い方があること、どちらも同じ意味になることは知っておく必要がある。使うことはできなくても、聞いて理解できなければならぬからである。

(2) イ形容詞の活用とナ形容詞の活用

(1)の基本的活用がおおよそ身についた時点で起きてくるのが、この二つの活用の混同である。「白いじゃない」「きれいくない」「きれいかった」式の混同が起きやすい。「白い」「きれい」等の語彙が入っても、それがイ形容詞なのかナ形容詞なのかの判別がつかないこと、また、語彙として知ってはいてもそれを使おうとするときに、正しい活用形に結びつける練習が不足していることが原因である。イ形容詞かナ形容詞かを判別し、それに基づいてどちらかの活用形に当てはめる、というような操作を実際の場面でいちいち行っていたのでは会話は成り立たない。発音練習をかねた活用形の口慣らしを、日ごろから行い、考えなくても自然に正しい形が口から出るように指導する必要があるだろう。

(3) 語彙を広げる

学習した語彙を整理し広げていくときに、それがイ形容詞であるかナ形容詞であるかが識別できることが必要となる。名詞に続く形が「い」になっていればイ形容詞、「な」

になっていけばナ形容詞なのであるが、日本語学習者の場合は、それだけでは不十分である。「～です」の形や、否定の形、普通体の言い切りの形（大きい、きれいだ等）などからイ形容詞かナ形容詞かを判断する力を養う訓練も必要だろう。

「～です」の形を例にとれば、「です」の前に「い」がくればイ形容詞、それ以外であればナ形容詞ということになるが、ここで「きれい」「きらい」等、「です」の前に「い」がくるナ形容詞もあることに注意しなければならない。

また、識別の問題とは別であるが、イ形容詞の中で「危ない」「少ない」「きたない」等、「ない」を含む言葉に関して、否定の「ない」と、意味の混同が起きやすいことにも注意を払う必要がある。

*レベルⅠの学習者の場合には、イ形容詞ナ形容詞を識別するための訓練は、かえってマイナスの効果を生むことになりかねない。日頃の口慣らし的な練習の中で、語彙・活用ともに定着させていく方法が一番望ましいと思う。語彙定着の際にも、場面や実物等とも豊富に結びつけ、終助詞も加え、すぐに使えるような形で練習する工夫が必要である。（「きれいな」を例にとるなら、着飾った女性や美しく盛りつけられた料理、美しい食器やきちんとした室内、美しい風景等の写真を大量に用意し、感情をこめて、「きれいですね」「ほんとうにきれいですね」というような練習等）また、こうした練習のほかにも、次のような形で、発音練習を兼ねた口慣らしを、毎日五分くらいずつ続ける方法も有効だろう。

例：（イ形容詞）

とてもおいしいですね。	ちょっと高いですね。	あまりおいしくないんです。
とても安いですね。	ちょっと甘いですね。	あまり暑くないんです。
とても高いですね。	ちょっと暑いですね。	あまり安くないんです。
とてもきたないですね。	ちょっと寒いですね。	あまり広くないんです。

*レベルⅢの学習者ではイ形容詞・ナ形容詞の識別に加え、語彙の広げ方についても指導していきたい。「自然な」「不自然な」等「不」をつけて反対語を作るもの（このとき「便利な」「不便な」、「有利な」「不利な」等形が少し変わるものについても注意）、「協力的な」「一般的な」等、名詞に「的」を付けてナ形容詞になるもの、「協力的な」「非協力的な」、「実用的な」「非実用的な」等、「非」を付けて反対語を作るもの、また、「ソフトな」「シンプルな」等、外来語の形容詞に「な」を付けてナ形容詞として使うもの等を一度整理して学習の助けになるようにすることも必要であろう。

(4) 名詞の前に来る形

「白い本」「有名な本」等、名詞に続く活用形の場合、初級、上級を問わず問題となるのは、「白いの本」「有名な人」「有名の人」式の間違いである。これは母語である中国語の影響が考えられるが、かなりの上級者にも、この種の間違いがなかなか取れ

ない例が多い。これは、学習者に自分の間違いのパターンを自覚させることが必要であろう。

(5) 文型学習

(1)の基本的な言い切りの形や、名詞に続く形の習得から次の段階に進み、様々な文型の中で形容詞を用いるときにも、いろいろな問題が出てくる。特にナ形容詞は、学校文法で言う「終止形」と「連体形」の活用形が違うので、いっそう複雑になる。各文型ごとに、動詞の名詞も加え、続き方をよく整理し、十分な練習を繰り返す必要があるだろう。

例： 「～らしい」 (推定)

動詞	イ形容詞	ナ形容詞	名詞
来るーらしい	暑いーらしい	便利ーらしい	休みーらしい
来ないーらしい	暑くないーらしい	便利じゃないーらしい	休みじゃないーらしい
来たーらしい	暑かったーらしい	便利だったーらしい	休みだったーらしい
来なかったーらしい	暑くなかったーらしい	便利じゃなかったーらしい	休みじゃなかったーらしい

ナ形容詞と名詞は形の作り方が同じなので、初めは、動詞、イ形容詞、ナ形容詞、名詞の順番で整理していった方が分かりやすいだろう。こうした整理を積み上げ、最終的には、動詞であろうと、名詞であろうと、形容詞であろうと、スムーズに形が作れるようにもっていく必要があるだろう。

なお、教授者の便宜のために、基本文型におけるイ形容詞、ナ形容詞の活用形を整理した表を付しておく。(繁雑になるため、否定の形、過去の形は省いた。)

接 続	一名詞	一の(を)	一ので	一とき	一なる/する	一て、
イ形容詞	しろ㊶	しろ㊶	しろ㊶	しろ㊶	しろ㊶	しろ㊶㊷
ナ形容詞	便利㊸	便利㊸	便利㊸	便利㊸	便利㊸	便利㊸

接 続	— そうだ (様態)	— らしい	— だろう — かもしれない	— から (理由) — と思う — そうだ (伝聞)
イ形容詞	しろ○	しろ①	しろ①	しろ①
ナ形容詞	便利○	便利○	便利○	便利㊦